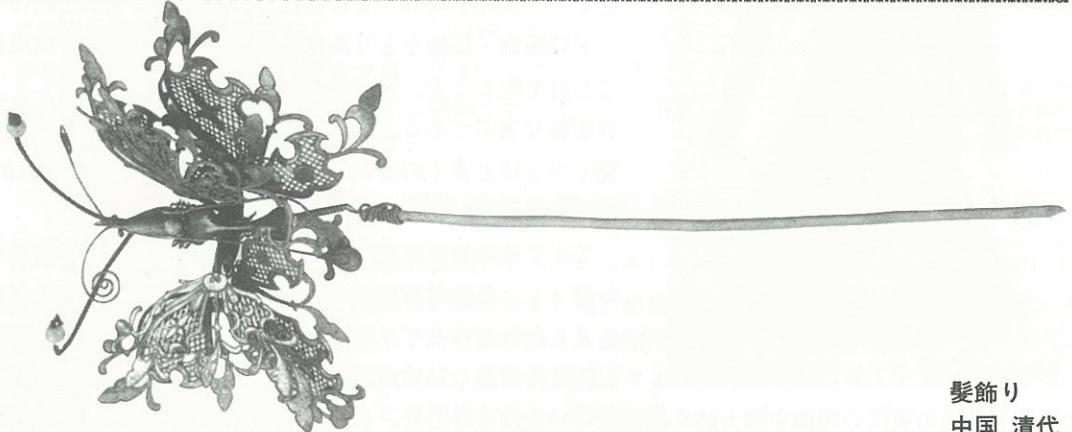


# 文化学園服飾博物館だより

第2号  
May. 1989



髪飾り  
中国 清代

## 美しく充実した展示をめざして

博物館の仕事として、資料の収集、保存、調査・研究、展示、普及・教育などがあげられます。博物館を利用する人々とのもっとも重要な接点は展示活動で、どこの博物館も展示には力を入れています。服飾博物館も予算をあまりかけない手作りではありますが、より美しく、より充実した展示をめざして工夫を重ねています。学芸員資格取得のために文化女子大学博物館学課程生が展示替えのたびごとに提出するレポートにも、展示がずいぶん良くなったという言葉が多くなりました。どんなところがよくなかったか、百聞は一見に如かず、忙中閑あり、大勢の方に博物館を見にきていただきたいと思います。博物館の展示が研究・教育・学習活動に役立つことを、そして博物館に来ることが心のゆとりになることを願っています。

文化学園の教授陣には、服飾に関するあらゆる分野の専門家がそろっています。それらの人々の研究成果が服飾博物館の活動に反映されるならば、服飾の専門博物館としてこの上ない強味と言えるでしょう。前回の展示で、新収資料としてイタリアの素晴らしい宮廷衣裳1点が紹介されましたが、そのような場合、被服材料学、被服構成、染織史、服装史などの観点から纖維、織物技術、織物文様、裁断・縫製、着用の組合せ、歴史的背景などが細かく調査され報告されるならば、それは一つの立派な共同研究となるでしょう。また民族服飾、民俗服飾、服装社会学、服装デザイン、色彩学、意匠学、手芸、染色・織物工芸、民族学、民俗学など、どれをとっても博物館の服飾資料の研究に欠かせない分野です。テーマによっては、一つの展示が研究成果の発表の場でありえます。今後このような研究の協力体制を整えていくことも、充実した展示への道を開く一つの課題と思われます。

(文化学園服飾博物館学芸室長 道明三保子)

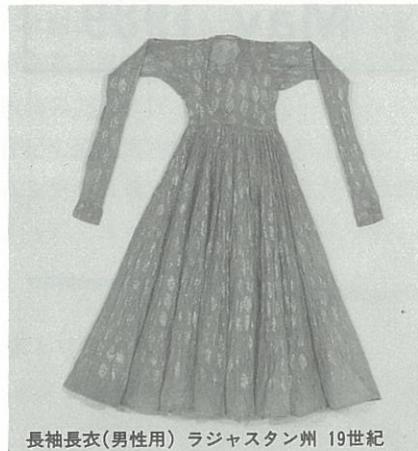
# 特別展 インドの服飾・染織展

1988年9月26日～11月26日

主催／文化学園服飾博物館

後援／インド大使館

協力／アジア染織資料研究  
センター(パリ)



長袖長衣(男性用) ラジャスタン州 19世紀

はインド各地の現代の服飾を精力的に収集していただきました。西岡由利子さんは更紗の製作工程の実物資料を、山田一雄氏にはインド染色製作風景のビデオをお借りし、またR. アロラさんはサリーの着せ付けと「インドとのふれあい—サリーとインド料理」の講演をしていただきました。文化女子大学の小川安朗名誉教授にはインド服飾の解説を、成瀬信子教授には素材分析をお願いいたしました。

このように、今後とも学園内外のネットワークを充実させ、博物館活動を向上させていきたいと思います。

1988年度服飾博物館秋の特別展『インドの服飾・染織展』が、9月26日から11月26日まで開かれました。インド祭の年ということで日本各地で美術展や演劇・音楽会などいろいろな催しが行われましたが、文化学園服飾博物館特別展はインド大使館後援のもとに、パリにあるアジア染織資料研究センターの密接な協力により、成功裡に開催することができました。

昨今のエスニック・ブームを反映してインドの布は大変な人気を呼んでいますが、博物館としては、多様性にとんだインド文化を理解するにあたり、学術的にも多面的にインドの服飾・染織をとりあげること、欧米諸国の研究成果にも目を配ること、布を作る人や鑑賞する人にも美しく、有意義な展示であることなどを目標といたしました。幸い、驚くべきほど多くの方々の絶大なご支援を得ることができ、非常に好評でした。

アジア染織資料研究センターからは貴重な歴史的資料をお借りし、博物館所蔵品の足りない分野をうめることができました。理事長でインド出身のK. リブーさんから展示に関する有益な助言を得ました。K. ビジヤバルギヤ氏に

## 工芸展示室公開される



12月12日 第3回「ソビエト民族衣裳展」オープンと同時に、服飾博物館第4室がほぼ常設の工芸展示室として公開されました。これまで博物館が収集してきたもので、一度も紹介されなかった工芸関係の資料など72点が展示されています。

中国先史時代の渦巻文彩陶、唐時代の海獣葡萄鏡や胡人陶俑、西アジア・エジプト・アンデスの古代土器、アール・ヌーヴォー様式の銀器やアクセサリー、ミュシャの四季絵、ガレ、ドームのガラスなどの優品が、重厚な陳列ケースにやわらかなスポット・ライトをあてて並べられ、静かな雰囲気の中でゆっくりと鑑賞できます。

それらはさまざまな工芸素材の特色や歴史を理解し、世界各地に花開いた文明の特色を知るうえで役立つことでしょう。服飾を広く造形活動全体と関連させる視点をもつことも工芸室のねらいの一つです。今回の公開は生活造形を学ぶ学生にもなかなか好評です。

## 第3回 ソビエト連邦民族衣裳展 ヤクート自治共和国(ヤクーチヤ)

1988年12月13日～1989年2月18日

ソ連邦对外友好・文化交流団体联合会、ヤクート自治共和国文化省、財団法人・北海道日ソ友好文化会館の協力のもとに、第3回「ソビエト連邦民族衣裳展」が開催されました。

ヤクーチヤの気候はとても極端です。冬の気温は摂氏60～70度まで下がりますが、短かい夏はプラス35～45度まで上ります。そんな寒さの冬、人々はウールの上衣の上になるべく毛足の長いコートを着ます。そして暖かい帽子をかぶり毛皮のブーツをはきます。上衣には現代的モードが求められるとしても靴だけは今日でも民族的な特徴が実生活の中でしっかりと受け継がれています。オオジカの脚の皮でできた女性用ブーツは、上端にビーズを伝統的な装飾のモチーフに従って刺繡した派手な縁飾りをつけ、男性用ブーツには2色の毛皮の装飾をつけます。



ソロビヨワ氏、ニコラエワ氏



コート  
(女性用)  
19世紀

### 運営委員会開かれる

昨年12月12日第3回「ソビエト民族衣裳展」オープニング・パーティー終了後すみれ会会議室にて、館長の諮問機関である博物館運営委員会が開かれました。出席の運営委員は、大学から居宿昌義、成瀬信子、鈴木幸彦、学院から井上喜久子、青木伊津子、古田隆吉、事業局からは宮沢正次の諸先生方、博物館側からは大沼淳館長と職員数名で、運営委員の方々より多くの有益な意見を聞くことができました。例えば、展示作品1点ごとに専門的な詳しい解説が欲しい、ガラスごしてなく直によく見てみたい、授業で見学する前に先生方で勉強する機会をもちたいといった服飾の専門家らしい要望がございました。博物館も少ないスタッフで多くの仕事を抱えていますが、このようなことが少しでも実現できるよう方法を模索したいと思っています。

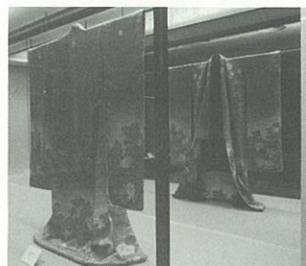
### 館蔵品展 西洋服飾1930-45年 小袖・装身具

3月3日～4月15日

年度始めなので、ファッショント勉強するため入学した学園の学生に見ていただきたいドレス・小袖類を選びすぐって展示いたしました。

「西洋服飾1930-45年」 女性らしさを強調した、スリムでロングのアフタヌーン・ドレス、イブニング・ドレス約30点と当時のファッショント・ブックなど。

「小袖・装身具」 江戸時代後期から大正時代にかけての小袖15領と、櫛・笄などの髪飾り、筥迫・紙入・煙草入などの袋物約60点。



菊花文様小袖 明治時代

### 昭和63年度展示報告

新しい「文化学園服飾博物館」のしおりができました。ご利用ください。



昭和63年 3・4月	館蔵品展 西洋「ドレス・帽子・バックー1850-1910年代」 東洋「清朝末の宫廷衣裳」 日本「装束・小袖・名物裂」 3月16日～5月28日	特別展 「インドの服飾・染織展」 9月26日～11月26日	10月
5			11
6			12
7	館蔵品展 オリエント「ペルシア裂・コプト裂」 日本「帷子・单衣」 西洋「服飾の1920年代」 6月10日～9月3日	第3回「ソビエト民族衣裳展」「新収資料」「工芸品」 12月13日～2月18日	平成元年 1
8			2
9		館蔵品展「西洋服飾」「小袖・装身具」 3月3日～4月15日	3・4

# 博物館所蔵の韓国服飾資料の調査

平成元年3月6日から3日間、韓国ソウル市の檀国大学大学院教授・石宙善女史と東洋服飾研究院院長・金英淑女史によって、服飾博物館所蔵の韓国関係の服飾資料の調査がなされました。その結果、年代は1910年から1945年頃のものですが、資料として高い価値を有するものが106点にも及ぶことが明らかにされました。とくに1956年(昭和31年)に文化女子短期大学学長であった徳川義親氏に贈られた李王家の徳恵王女に関連する服飾資料は、韓国の国宝級ともいべき歴史的意義をもつものと評価されました。この調査の成果は、7月15日から始まる展示において石宙善女史監修『韓国の服飾』として報告いたします。今年78歳になる石女史は、生涯を韓国の民族服飾研究に捧げてきた韓国を代表する研究者で、その収集品のすべてと図書を檀国大学に寄贈し石宙善紀念民俗博物館を設立されました。わずか3日間でしたが、雪の降る寒い中、調査に打ち込まれる石女史の真摯な姿に接し、その研究者魂に深い感銘を受けました。石女史も文化学園との共同研究によって、日本との学術交流の機会がもてたことを大きな喜びとされていました。



## これからのお見どころ

● 5月10日(水)～7月4日(火)

### インドネシア・フィリピンの服飾と染織

インドネシアはスマトラ島、ジャワ島を中心、特色ある意匠を表した腰衣、肩掛けなどを展示する。バティック(蠟緋染)、金更紗、イカット(絣)と男女婚礼衣裳など約26点。

フィリピンでは山地民の服飾から、精巧なビーズ飾りの衣服やアバカと呼ばれる葉鞘繊維でできた布、珍しい装身具などを紹介する。また、特にミンドロ島をとりあげ、写真パネルと共に日常生活の中での服飾など約45点を展示。

インドネシア文化、フィリピン文化を知るうえで、まことに興味深く、一見の価値のある貴重な資料展示である。

### 庶民の服飾(明治～大正)

明治から大正時代に着用された仕事着・大漁着・火事半纏・絆着物・祭衣裳など27点。

● 7月15日(土)～10月5日(木)

### 西洋服飾1946～70年

#### 韓国の服飾

#### 型染(小紋・紅型)

● 10月20日(金)～11月18日(土)

#### 特別展「館蔵名品展」

● 12月4日(月)～2月17日(土)

#### 第4回「ソビエト連邦民族衣裳展」

## 利 用 案 内

【休館日】 日曜日・祝祭日

年末年始・夏季休暇(8月7日～8月19日)

学園の創立記念日(6月23日)

展示替えの期間

【開館時間】 平日…午前10時～午後4時30分

土曜日…午前10時～午後3時

(入館は閉館30分前まで)

【入館料】

	個 人	団体(20名以上)
一 般	300円	200円
学 生	200円	150円

(特別展の料金は別に定める。)

※文化学園の職員・学生、及び職員が同伴する

外来の方々は無料

『文化学園服飾博物館だより』第2号

発行所 文化学園服飾博物館

〒151 東京都渋谷区代々木3丁目22番1号

PHONE 299-2387